**周辺人物から見る伊藤博文像**
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 3**年　錦川健太**
**1.はじめに**
　1909年（明治42年）10月24日、伊藤博文の乗った汽車はハルビン駅に到着した。伊藤の来訪の目的の一つは、韓国併合についてロシア側と協議することにあり、韓国と国境を接しているロシアと清国の韓国併合に対する了承を得るためにロシア蔵相のココーツォフと会談することにあった。到着し、ココーツォフと初対面の挨拶を交わしたあと伊藤はプラットフォームに降り立ち、軍隊や歓迎の人々を右手に見ながら歩み出した瞬間、軍隊の一端後方より青年が現れ、伊藤に近づき数発うった。安重根である。三発が右から伊藤に命中し、そのうち二つが肺を貫通し致命傷となった。このとき時刻は午前9時30分、伊藤は直ちに列車内に抱えいれられたがその30分後死亡した。

韓国から見れば、平和の使者が悪の象徴であった伊藤博文を打倒した瞬間であり、日本から見れば一大物政治家がテロリストによって糾弾に倒れた瞬間である。

安重根からみて、伊藤博文はまさに悪の象徴であった。安重根は伊藤射殺による裁判の理由として十五の罪を具体的に挙げている。
（1）明成皇后を暗殺した罪、（2）乙巳保護条約を強制的に締結した罪、（3）丁未七条約（第三次日韓協約,1970年七月）を締結した罪、（4）光武皇帝を廃位した罪、（5）大韓陸軍を解散させた罪、（6）良民を殺害した罪、（7）大韓の利権を奪取した罪、（8）大韓の教科書を焼却した罪、（9）新聞雑誌の発行を禁止した罪、（10）日本の第一銀行券を発行流通させ、大韓帝国の経済を吸収した罪、（11）国債千三百万円を強制募集した罪、（12）東洋の平和を壊した罪、（13）保護政策の名実を伴わせなかった罪、（14）孝明天皇を殺害した罪、（15）日本と世界を欺瞞した罪、である。
1909年11月24日の第6回尋問では、検察官に「其の方の言う東洋平和というのは如何なる意味か」と問われ、「夫れは皆、自主独立して行く事が出来るのが東洋平和です」と答え、次のような寓話を用いてその思想について説明し、その中で伊藤個人の害について取り上げる。　「ある村に三人の兄弟がいました。一番目の兄（清国）は資産家で、二番目（韓国）は貧乏、三番目（日本）はそこそこの資産を持っていました。ある時、二番目の家族が争いを起こしたので、三番目の弟が止めに入りましたが、一番目の兄は三番目の弟が乱暴しているのを見て、とうとうけんか（日清戦争）になってしまいました。これを見た隣人（ロシア）が制止したのです。一番目の兄は仲裁してくれたことを喜び、隣人にお礼として田地を贈りました。（旅順・大連租借権、東清鉄道敷設権供与）。それを不満に思った三番目の弟は、牛馬を買い、身なりをかざって贅沢をし（富国強兵）、借財（外債）をしてけんか（日露戦争）を始めました。そして、とうとう姦計をめぐらせて二番目の兄の財産を横領しようとし、他人には、自分は兄から後見人になってくれと頼まれたと偽り、二番目の兄の家に入り込み（統監府設置）、田畑を勝手に耕し、横暴を極め、迫害を加えました。人々は三番目の弟を懲らしめる相談をしました。ある人（ロシア）は弟に制裁を加えるついでに三人の兄弟の財産を横領してはどうかといいました。またある人は三番目の弟（日本）の一族は皆が悪いのではない。その家の伊藤というものが悪いのだ、といいました。この三家は兄弟なのだから、心を一つにすれば三家とも安全に維持することができるのです。東洋各国の五億人がみな手を取り合って協力すれば、他のどこの国にもあたることができるのです。自分（日本）が飢えているから他人を食い物にして独り占めしようとすれば、みなの一致を妨害することになります。伊藤は、二番目の兄（韓国）を食い物にした弟と同じです。伊藤の悪政のため、韓国では民衆が蜂起し、人々の生活は安全を失い、保護政策の実行はあがらず、清国も感情を害し、日清戦争の仇討ちを民衆に期待しています。アメリカでも、日本が多数の移民労働者を送りだしたため、日本人排斥の声が上がっています。ロシアの対日感情もよくありません。殊に、韓国一般人民が、一度、日本と戦い、現在の不幸を克服しようと日夜苦心していることは、私からいうまでもないことです。…結局伊藤の政策が悪いため、今日の状態に至ったのです。もしも伊藤が姦策を強制しなかったならば、東洋平和であったと思います。」（1）

このように三人兄弟（新・韓・日）の寓話に託して、日本の近隣諸国への侵略政策が東洋平和を乱していることを指摘した。伊藤博文というのはまさに彼の理想である三国協力「東洋平和」を妨害する「悪」「植民地主義者」そのものであった。

しかし、日本では伊藤は近代日本建設の最大功労者の一人としてのイメージがその大部分を占める。西洋の制度と文物を積極的に受容し、近代貨幣制度を確立し、内閣制や華族制の創設、そして憲法制定、日清戦争などに主導的にのぞみ、西洋帝国主義国家と対等な近代国家の建設を進めていったことを考えると、その評価は妥当である。伊藤ほどその善悪両面から照らされた人物はいないであろう。ここからは、おもに伊藤の人生においてかかわりのあった人物からの伊藤の評価を見ながら伊藤博文の人物像を形作ってみようと思う。

**2.吉田松陰からの評価**
　伊藤博文の精神形成にある程度の影響を及ぼした人物の一人としては、まず吉田松陰があげられる。松陰は、伊藤が松下村塾に入塾した翌年の安政5年6月に門下の秀才久坂玄瑞にあてた手紙の中で、伊藤をこのように評価している。
「利介（伊藤博文）亦た進む、中々周旋家になりさふな」（２）（伊藤の学問はまた進歩した。彼はかなりの高渉家になりそうだ)
また同年10月には
「才劣り学穉きも、質直にして華なし、僕頗る之れを愛す」（３）（才能は劣っており、学問は未熟であるが、性格は実直で素直である。私はとてもこの弟子を愛している)

ここで使われている「周旋家」とは、人から好かれ交渉が上手という意味であり、松陰は彼を政治家に向いているという意味でその言葉を使ったのではない。松陰が伊藤の中に認めたのは、才覚は劣っているが、勉強熱心で快活なところである。交渉能力に長けた能吏になりうるかもしれない、という見方はしていたのかもしれないが、後に国家形成にここまで貢献する人物になるとまでは思っていなかったであろう。
 **3.大隈重信からの評価**　伊藤と大熊重信は、明治の始まりから木戸孝允や大久保利通を共に支えて近代化を推進してきた同志であり、その一方で晩年には大隈が伊藤に相談することなく2年後に国会を開設することや政党内閣制を採用すべきであるという旨を上奏したことにより、伊藤が大隈とその一派を政府から追放するということ（明治14年の政変）もあったりと、いろいろとめまぐるしい関係である。大隈からの伊藤の評価としては、
「事をおこすときは、規則をたてて道理を正し、秩序整然としてはじめる。しかし終わりまでその大道をつらぬくかといふと、時として雲の中に道を失ひ、あきらかでないといふことがあった」（４）
　また以下は月刊誌『太陽』の伊藤射殺による臨時増刊号においての記者との談話取材である。
「…じつに立派な政治家だった、と。伊藤の人物評は、この一言で尽きる。吾輩が敬服しているのは、頭脳が多方面で、性格が調和的であったことだ。政治家は頭脳が多方面であることが重要だ。国家を形作る各種の勢力を、いろいろな方面から視察して、時と場合に応じて料理、按配していくことで、軍事、外交、財政、教育、民情、風俗などを比較的考慮しなければならぬ。このような頭脳の政治家が、幾人ほど日本にいるか。どうも視野がせまく、全体に行きあたらない。いわゆる専門に走って、常識が発達していない。頭脳が多方面に働かないのだよ。また伊藤の性格がきわめて調和的であったことは、政治家に稀にみられる美点であった。政治には両方面の衝突が、必然的にともなう一つは政権の争奪で、野にあるものは朝にある者を倒そうとして、積極的に衝突する。廟堂に入って政治を行う者が、その失敗を恐れて責任を逃れようとするのは、積極的な衝突である。それは政治家に野心があるからで、野心がなければ政治家の意味がない。しかし、あまり野心が燃えると、ただ野心のために、政治を行うことになる。無闇に政権の争奪に腐心したり、責任の所在を避けることは、正解のため国家のために忌むべき行為だ。ところが、伊藤はそうでなかった。常に国家のために政治を行い、野心のために政治を行わなかった。むろん政権を握れば、自己の野心を満たすために全力を尽くしたけれども、国家ということを忘れなかった。であるから、みだりに政権の争奪や、自己の責任逃れをしなかった。これは伊藤の調和的な性格がしからしめたもので、ここが偉いところだ。わが国の政治が、比較的円満によどみなく発達してきたのは、伊藤の調和的な性格がもたらしたものといえる。…伊藤の今回の死は、まことに国家の不幸である。しかし、吾輩はただ悲観するわけにはいかぬ。伊藤は死んでも国家はますます生存競争に奮闘しなければならぬからだ。わが国はますます伊藤のような大人物を必要とするから、かならず第二の伊藤が現れると思う。」（5）
明治14年政変での追放や、条約改正の中止など、伊藤に押し切られた苦い思い出があり、なかなか素直に評価できない旨の発言をしつつも、伊藤の政治を行う姿勢、資質については高く評価していたことがうかがえる。
 **4.木戸孝允の評価**
　木戸孝允は1873年（明治6年）に当時32歳であった伊藤を「剛凌強直」と評したという（6）。
剛凌強直とは「強く厳しく正直」という意味である。伊藤の人生を振り返ってみると、女にふしだらであるなどの部分は私生活で明治天皇に注意されるほどにあったものの、その政治家人生としては、韓国併合における保護国化構想を貫こうとしたり、憲法構想における妥協を許さなかったり、数々の決断、実績からみて剛凌強直という言葉をあてはめても謙遜ないものである。松陰が述べた「周旋家」という評、大隈がたたえた「頭脳が多方面で性格が調和的である」という評はどちらもその人格の柔軟性から讃えている点では共通しており、彼の人物像を形作るうえで、その人と人との間での立ち回りの良さのようなものは自身の残してきた業績、下級武士からのし上がってきた過去などからみて、その根元に位置しているものである。一言でいえば彼は「スマート」と言い表してよいのかもしれない。そのスマートさが時には女好きであったという逸話などと絡み合って、「ずるがしこい伊藤博文像」というものを形作り、韓国からしてみれば併合をひょうひょうと推し進めていった冷徹な印象をより強めているのかもしれない、と個人的に思った。伊藤ほど評価が時代ごとに、国ごとに分かれていく人物もおらず、そのつかみどころのなさ、多面性こそ晩年まで日本国家を動かし続けてきた強さであり、剛凌強直かつ柔軟な伊藤博文像の象徴であるといえる。

**5.まとめ**
　一般的に認知されている伊藤博文像としては、女好きであった、世渡り上手である、というイメージが強いと思われる。それは確かに彼の周りにいた人物の評価からみても正しいといえる。ただその世渡り上手ということをマイナスととらえるか、プラスととらえるかと考えると、伊藤自身は個人的な名誉、利益のために行動していたということはなく、彼の周辺人物における評価から見ても純粋に国家のために動いていたと思われるので、その世渡り上手というイメージは、人と人との間での立ち回りにおける「柔軟性」に長じていた、としてプラスにとらえられるべきであると私は思う。当時の彼の国葬における描写として、柩の出発地の霊南坂官邸から榎坂・溜池・葵橋方面にかけて早朝5時から人垣ができ始め、どこも人の山だらけになり日露戦争の「凱旋騒ぎ以上」であった、日比谷公園から大井町の墓地までも小中学校、大学・専門学生、消防組、町内会などが参列してみおくる、墓地内の空き地も騎象の生花・造花数千対でほとんど埋め尽くされた、伊藤の絵葉書も沿道各所の露店で売られ、いずれも午前10時前には一枚も残らず売り切れた（7）などとある。このことからも少なくとも国民の大多数の目には、伊藤は日本国のために力を尽くした政治家としてはっきり映っていたと考えられる。私なりに伊藤像を結論づけると、人当たりの良さを彼の特性として評価されている割に、彼のその行動にひそむ本心のようなものはあまり読み取られておらず、そのことが彼という人間をとらえることを困難にさせ、数々の人間が彼をわからないという（8）一因になっている、しかしその本心を読み取らせないということこそが政治家として一つの大きな資質であり、伊藤博文が偉大な政治家になりえた理由である、と思った。

註
(1)『伊藤博文と韓国併合』153頁
(2)『伊藤博文…近代日本を創った男』27頁
(3)同上27頁、28頁
(4)同上526頁
(5)『伊藤博文と安重根』180頁、181頁、182頁
(6)『伊藤博文…近代日本を創った男』8頁
(7)同上576頁
(8)『伊藤博文～知の政治家』5～7頁

参考・引用文献一覧
・伊藤之雄『伊藤博文…近代日本を創った男』（講談社、2009）
・佐木隆三『伊藤博文と安重根』（文芸春秋、1993）
・高大勝『伊藤博文と朝鮮』（社会評論社、2001）
・三好徹『史伝　伊藤博文　㊤㊦』（徳間書店、1995）
・渡部昇一・岡崎久彦『国のつくりかた　明治維新人物学』（到知出版社、2000）
・瀧井一博『伊藤博文～知の政治家』（中公新書　2010）
・海野福寿『伊藤博文と韓国併合』（青木書店　2004）